

義批判をひとりて受けて立った。総講頭としての使命と受け止めたのであった。その様子を当時の大日蓮記者の筆を借りて述べよう。

＊三時間四十分の反駁演説会

「本宗の総講頭荒木清勇居士は、三月四日の日曜をトして「田辺善知先生の高等批判の弁駁」と題する盛大なる演説会を開かれた。趣意はいうまでもなく標題のごとくである。荒木居士のこの挙に出でられた理由は、改めていうほどでない、田辺善知の日蓮正宗教義一班の批判に対して、当然に、堂々と、弁駁しなければならぬ事情であったのである。

そこで居士は、穏健な態度を持してあくまで慎重に弁駁せんと苦心せられた。当日に至るまでには日蓮宗大学の職員、日蓮宗の宗務院は喜多村管長已下全部の役員を招待し、なおかつ日蓮宗の有力寺・各教団にわたって、案内状、招待状、趣意書を発呈せられたのである。

一方、田辺善知へは演説内容の照会や言責の証明を交渉するなど、費用の点はいうまでもなく、準備に関する細大一切を個人で処理し、反論の原稿を作成するにいたるまですべて単独の行動であった。

当日は晴天であつたので、大崎館の入りは盛況であつた。他教団の僧俗約四百名、しかも堂々たる名士の多かつたのはすこぶる満足である。本宗の信者も二百人以上であつた。

午後一時半に田辺喜一が立つて、開会の辞を一言せられ、ついで荒木清勇が登壇せられた。清勇居士の演説は長講一席、三時間と四十分になつてことこまかに反論弁駁せられた。田辺善知が三回にわたつて批判したのを一回の三、四時間で弁駁せらるるのであるから、一言のむだな言葉も入れてはいられない。したがつて言々句々、一々文証を引き出し、故事を引証して、彼が浅薄にして不徳義なる妄批判について、一々に痛撃を与えて完膚なきまでに折伏せられた。造詣の深きこといまさらに言うに及ばざれども、今回のごとき熱烈なる態度を示して、縦横にかの善知氏の曇妄なる批判を論破せられしは、実に讃仰すべきであつた・・・。

この演説会の記録は、すぐさま田辺喜一の支援によつて印刷に付され、六月十九日に『長夜の大燈』として発刊されている(B六判一〇四頁)。初版千二百部が各方面に贈呈されたが、たちまち品切れになつた。内容的には田辺善知が日興門流の法義に暗いまま感情的に批判しているのに対し、紳士的に礼節を失わず道理文証をあげて理路整然と反論している。この演説について、田辺善知は『日宗新報』において、

「宗門代表の僧侶ならともかく在家は相手にしない」

「法門しりたりげに候人々は悪しく候げに候」

などと在俗の信徒が法門を云々することは増上慢であるかのようにいい、無視するような対応をとった。そのため清勇の反論は優勢のままに終わった。そしてこの演説会は門下全体から広く注目され、日蓮正宗に荒木清勇ありと評判されたものである。

近代における教団間の論争というものは、他の学問の諸分野における論争などとは本質的に異なっていて、それぞれが信ずる教義を一方的に主張しあうだけで、議論する共通の土俵・この場合御書や経文、また用語の定義や概念・すらかななか一致しない。まして教団組織を守ろうとする我田引水の執心が、お役人か何かのように夫れぞれの宗義を反復し てくりかえすばかりで、公平・公正な立場から真理を追究するような真摯な姿勢など求むべくもない。そのうえ最後は感情的になって悪口雑言の捨て台詞となる。

そうした風潮の多い中、清勇のこのような穏健かつ公平な態度は高く評価されてしかるべきかと思う。

もちろん荒木清勇の教学が絶対というのではない。清勇の著わした書物を開いて、その教義や歴史観を見ると、現代からみれば、明治・大正という時代の制約と限界性も指摘できよう。国体思想の無批判な受け入れも今では通用しない。やや皮相的・即物的な本尊

観にも課題が残る。しかし、その修学に対する基本的精神においては、いつでも公平かつ客観的な立場を維持しつつ、真理を求めようという柔軟な姿勢が感じられ、その真理を求める真摯さには学ぶべき点が多い。またその相手に対する礼を失わない紳士的態度にも多くの人々が好感を抱いたようである。

*法門研鑽と日蓮正宗会の設立

荒木清勇の法門研鑽の精進ぶりが一通りでないことは、田辺善知への反駁ぐらいいでは収まらないところにある。一方では当時、富谷日震らが発行する要法寺系機関誌『文底』誌では富士の不読誦不造像主義を批判していたのに対し、『白蓮華』誌に「文底総まくり」と題して大正五年十二月号から五回連載で反論している。

また大正六年三月四日の反駁講演で上京中には、それぞれ独自に活動していた東京の法華講各講中・布教団体を統合するよう日蓮大聖会総裁の応師に進言し、その実現のために各講中に幹旋の労をとっている。その間に応師の住坊潜龍閣にてしばしば会合をもち、三月五日(演説会の翌日)には、応師を総裁として日蓮正宗会(後の日蓮正宗布教会)を発足させた。

その第一回の発会式は三月十六日に潜龍閣にて開催され、大石総裁挨拶・荒木清勇の念

告・田辺喜一の綱領説明などがあって、ここに初めて在京の僧俗・寺院講中を統合した布教団が結成された。

また急遽四月二十六日にも常泉寺に於いて宣言式が行われることになった。当日は約四百名の熱心な清信士女が参加し、読経唱題の後、総裁の応師より日蓮正宗会創立の趣意が宣言された。次いで代表僧俗の祝辞があり、最後は由井一乗大講頭の辞で閉会となった。なお荒木清勇総講頭は大坂から長文の祝電を寄せて代読で披露されている。また式後には模擬店も出て夕刻遅くまで親睦を深める賑やかな大会となった。

この時、大正二年から青年僧等が発行していた『自然鳴』（前名『法薫』）を、大正五年から刊行した日蓮大聖会の『大日蓮』に吸収合併する形で終刊とし、『大日蓮』を正式な日蓮正宗会の機関誌としている。

また、清勇はこの後も上京するたびに各所の講演会に登壇し、富樓那の弁舌をふるってゐる。たとえば、五月十六日に横須賀の広橋弥吉の尽力で、市消防隊事務所をかりて布教大演説会が開かれているが、講師に乞われた荒木清勇は有元広賀・松永行道・田辺喜一とともに、昼の部・午後二時半〜午後六時までと、夜の部午後八時から午後十一時までの講演会に弁士をつとめている。しかも荒木清勇・田辺喜一両名はその夜のうちに帰京したことが『大日蓮』の記事にも見えていて、東奔西走して身を惜しまないご奉公だったことが

うかがえる。

このような清勇の行動に各講中とも敬意を抱いていたのはいうまでもない。この頃、清勇の東京での活躍を陰で支えたのは、全国大講頭の由井一乗はいうまでもないが、品川大崎の妙光寺に所属する鍋木・金子・根岸らの有力者や田辺喜一らであったという。

やや時が流れて昭和七、八年の頃、有元広賀の弟子となって妙光寺に在勤した福重広輝（荒木清勇の孫）の追懐によれば、自分が小僧として妙光寺から棚経で檀家回りにゆくと、行く先々で、

「あの荒木さんのお孫さんか」

と、おどろくほど丁重にもてなされたという。檀徒間では父の照平房より、祖父の清勇居士が身近かに感じられて、後々まで敬愛されていたのであった。

* 妙静寺の設立

晩年の荒木清勇にとって、大きな喜びだったのは、大正六年に信友の中光達（弥兵衛）によって、滋賀県今津の琵琶湖畔に、妙静寺が寄進されたことである。

蓮華寺の総代・中光達（弥兵衛・大講頭）は、明治五年同地の辻家生れて、十三歳で大阪に出て中照商店に奉公、二十七歳の時にその精勤ぶりを見込まれて養子として中弥兵衛

家をつぎ、明治の産業発達期に事業を成功させて、大阪金網株式会社を起こした立志伝中の人である。中光達が宗門や大石寺の外護に尽くした事例は枚挙にいとまがない。けれども、中光達は決して功を誇るようなこともなく、目立つことをきらう清廉有徳の人である。荒木清勇と年齢は二十も離れているが、深く清勇を尊敬し、その著書の出版など、いつでも支援し続けている。

これより先、中光達は、護法の志も厚く父母や親族の教化に尽くし、郷里の地饗庭あえばでもしだいに正法に帰依するものが増えていた。そうした折に老父母の逝去にあい、その追福と仏法興隆のため住居だった別荘を寄進して寺院とすることを願った。

大正六年八月一日、清勇の長男でもある福重照平が丹波教会（興福寺）から転任し、初代住職の辞令をもって別荘の寺に赴任している。大津発の気船で琵琶湖を縦断して四時間ほどで今津港に着いたという。その後、辻九兵衛らとともに、関係官庁から新寺設立の認可をとるべく奔走したが、当時滋賀県は新寺建立の許可を出さない方針であったため、書類上は大石寺説教所として認証をえた。ついで中光達の寄進によって大正八年十月から本堂新築にとりかかり、境内地約六百坪、持添地田地山林あわせて約五町歩を寺有地として御供養したのであった。したがって妙静寺は中光達の一建立の寺である。

落慶入仏式は大正九年十月十三日に御会式をかねて奉修された。本山から正師を迎え、

京阪地方からも百数十名の僧侶・檀信徒が参列、地元からは檀家のほか、郡長・村長・県議・警察署長らも招待し、盛大なものとなった。

近在にビラも貼られていたため、境内には村人三百余人も集い、いやがおうでも村を挙げて祝う形となった。気分も昂揚するなか、御会式に引続き開堂式の法要となり式辞を読む中光達、発願の由来は清勇が、祝辞に立つ諸来賓、答辞を述べる福重照平、御親教、御本尊頂戴……。清勇の心には今生の思い出として多くの場面が刻まれたことであろう。

法要後は余興の大きがりな餅まきに歓声をあげ、ついで宮相撲が開催された。また夜に入ると、前日に引き続き大演説会が開かれ、ふだんは静かな村里が夜遅くまで時ならぬ賑わいを見せたことが地元紙にも報じられている。

ところで、八軒の檀家だけではどうも妙静寺の維持や住職一家の生活はなり立たないのだが、実は中光達が毎月二十五円のご供養を届けてお寺の台所を支えていたのであった。月々の御供養は二十数年にわたって変わることなく続けられ、昭和十六年に妙静寺総代一同が、お寺の一切のまかないを自分達で負担することを決意して、その徳行を謝するまで続いたという。

かくして住職の福重照平もまた名聞利養に恬淡として終生清貧に甘んじ、この村里の貧寺においてひたすら法門の研鑽の日々を送ることとなった。

* 『法華』誌上での論陣

大正の中頃、清勇は引き続き堂島浜の自宅で教学研鑽と著述に寧日なく過ごしている。これより少し前の大正三年、東京帝大教授山田三良、大審院検事矢野茂、中央大教授・小林一郎ら有識者によって法華会が創立され、法華経と日蓮聖人を宣揚するため宗教文化誌『法華』誌を創刊している。この会は昭和六年には中山法華経寺での真蹟紛失事件を契機として、日蓮大聖人の御真蹟を格護する聖教殿建設と聖教護持財団発足に貢献している。会は今でも山田・矢野・小林らの意志を継ぐ有志で継続しており、『法華』誌もすでに百余年、通巻千百号を越えている。

荒木清勇は、創刊間なし頃の『法華』誌上にたびたび論説を寄稿し、正宗系では一人気を吐いている。

いま繁をいとわずに、『法華』誌上に掲載された論文題名を列挙してみよう。

○「立正安国論に就いて」大正六年八月号

（安国論を単に正法への帰依と解釈すべきでなく、正師への帰依をも意味すると解釈）

○「承久書の真偽いかん」大正六年九月号

（承久書（弘安四年富木殿）を偽書ではないかとする論考）

○「末法の摂折」大正六年十二月から翌年三月号

(摂受折伏と四悉檀について)

○「大日本国民の魂」大正七年二月号

○「聖書拝読に就いて」大正七年六月号

(御書の解釈には所対と所判によって相違があり、勸誠の二門があることを例挙する)

○「親鸞研究を読みて」大正七年十一月号

(日蓮聖祖と親鸞上人の比較研究)

○「日蓮大聖人の国体観」大正九年九月号

とりわけ注目すべきは、田中智学・山川智応という当代一流の学者に対し、論戦を挑んだことである。

それは、このころ国柱会の聖典講究会が長滝智大・山川智応を主任として本化聖典大辞林の編纂にとり組んでいたが、それが大正五年一月発行の第一分冊を皮切りに大正八年正月に第四分冊にまで進捗していた。この御書辞典は、日蓮教学の進展に大きく寄与したのであるが、日蓮各派の教学には、それぞれ固有の解釈があり、それらを網羅するところまでには至っていない。この点において、日蓮正宗の文底下種の一念三千論を信奉する荒木清勇にとっては、宗祖の本懐という点において、はなはだ画竜点睛を欠くものに映った。

そこで『法華』誌上に

○「田中智学先生の高教を仰ぐ」（大正八年二月号・四月号）と題して、論陣をはった。

「田中先生監修の下に発刊せられたる『本化聖典大辞林』は、引証の書籍広博にして、かつ説明懇篤なれば、ただに蓮祖門下の宝典のみならず、実に国家の宝典といふべきものである。予は謹んで先生並びに聖典研究会各位の労を多とし深く感謝するのである。

而るに予は該第二分冊の「一念三千」の項を拝見するにいたり、たちまち疑義を生ぜしゆえ、再三これを繰り返したるも、予不敏にして、終に了解するあたわざる点四、五に及ぶ、就いては先生の膝下に伏して高教を仰ぐべきはずなれども、予と同様の生疑者もまたなきにしも非れば、願わくは先生の慈教を公にして、その恩沢を汎く同疑者に浴さしめんと欲し、失敬ながら法華の紙上を拝借して高教を仰ぐこととはなしぬ。」

こう、前置きして、天台の一念三千と宗祖の一念三千の同異について質したのである。これについて、田中智学は『法華』大正八年九月号に「荒木清勇氏に答う」と回答を掲載、その病身と多忙のゆえ、山川智応に相手を命じた旨を伝えた。山川智応は早速『国柱新聞』同年九月一日号と十月一日号に詳細にその趣旨と反論を掲載している。

この論文に接し、荒木は再び筆をとり、

○「一念三千の法門について」

というタイトルで、実に六回連載の長文を發表している。

いまその内容にまで立ち入るの暇はないが、両者の堂々たる論陣をみるにつけ、昨今の宗門や学会の中傷誹謗合戦の悪質さを思うのである。日蓮大聖人の門下たるもの、主張の違いはあったとしても、論争においては、このように公明正大で、フェアな態度でなければ、却って宗祖の御名を汚すことになるのではなからうか。

荒木清勇が、いかに公正な態度をもって本宗の教義信仰を宣伝したかは、

○「希望」(大正九年八月号)

という論説によっても確かめられる。これは大石寺の戒壇御本尊の願主「弥四郎国重」の考察をしたものだが、その当時国柱会が「佐渡始願の本尊」を宣揚し、日蓮宗また宮内省に奉献した「奉献本尊」を宣揚していたことに鑑み、真の戒壇御本尊を決しようという提案に主眼がある。すなわち、大石寺の戒壇御本尊や門下のこれと思わん本尊を一カ所に提出し、その筋の権威者に鑑定をしてもらった上で、その真偽・優劣を決せしめようというユニークな提案である。いわく、

「(各派や個人においても)一閻浮提第一の御本尊と拝信せらるるものなれば、一つ所に提出して、宗の内外を問わず知名の考家若干名を挙げて之れに託し、第一聖祖の御真筆なるや如何。第二御本尊の地質(紙絹木等なり)が御本尊明記の年代の質なりや。

第三その由来経歴。その他を鑑定せしめ、而して第一位に当選し給いたる大御本尊を、以来、閻浮第一世界統一の大御本尊と定め、これを一般日蓮宗の中心帰一の大曼荼羅と尊敬することとし、従来の積弊たる他山の宝、否国家の宝、否否世界の至宝を中傷することとき、我田引水の習性を洗除すべき事。・・」

と広く日蓮門下一般に提案している。そして、

「・・予がこの希望に御賛成あらん事を。さすれば予は責任を以ってわが本門戒壇の御本尊奉戴提出に務むべし」

と言いきっている。

いまの法主や宗務院役僧が聞いたら卒倒しそうな提案である。けれども当時の宗門で、清勇の提案が批判されたり問題視された様子はない。「予が責任をもって」とは、まことにおおらかなものである。清勇の主張は客観的に見れば公平で筋が通っているとも評せる。こうした主張がもし暴論であるとするなら、それはそれで、かえってセクト主義に凝り固まり、タブーと権威で何重にも呪縛された頑迷な教団であることを自ら語っているのではなからうか。

* 執筆と上奏の晩年

大正期は、日蓮主義がもつとも隆盛した時代であり、布教講演や教義研究も盛んになり、門下各派で多くの出版物が発行されている。

荒木清勇も『法華』誌上で論陣をはる一方で、精力的に執筆活動を行い、以下のような書籍を刊行している。まず、

※『日蓮主義大日本国民の魂』大正七年二月刊。この書は宮内省に献納し、天覧台覧の栄を賜っている(注)。巻頭に小笠原長生の書と小林一郎の序文を載せ、付録として以前出版した『大日本未来の鏡』(唱歌)を合編している。森江書房から公刊された。また以下のような冊子を出版している。

※『大日本国是と全世界の帝王』(大正八年四月二十八日刊・『大日蓮』にも掲載)

※『日蓮大聖人の国体観』大正九年十月刊・発行人中弥兵衛・B六判二十頁・巻頭に大迫尚道陸軍大将の揮毫あり。

※『産湯相承略解・神の声と仏の語』(聖誕七百年記念)大正十年一月刊・発行人中弥兵衛・巻頭に応師の揮毫あり。

こうして、大正七年頃に移転した大阪・玉手駅二丁北の居宅では、老眼を拭って著作活動に専念する日々が続いた。平穏な明け暮れだったが、壮健だった清勇も、老齢に加えて

永年の無理がたたり目に見えて衰えを感じずるようになっていた。

そうしたおり大正十年二月十一日、妻きぬが六十六歳で亡くなっている。相思相愛だったという愛妻との離別はさすがにこたえたか、清勇も数ヶ月病床に伏している。

ところがこの大正十年は宗祖生誕七百年に当たり、門下各派は布教伝道や記念事業で一斉に活気づいた。正宗関係でいえば宣伝飛行隊と自動車隊によるピラ配布、御一代記絵灯籠の街頭展示、提灯行列、大講演会や各種の施本など、各講中ともかつてない盛り上がりを見せている。

さらに皇太子裕仁がこの年三月から半年間渡欧し、大いに見聞を広めて外遊から帰国することがあった。これは国民的な慶事として、一般社会からも歓迎され、慶祝ムードがふれた。

清勇はこの慶事につき総講頭として最後のご奉公と思つてか、天奏の精神に準じて、病身ながら急きよ日蓮正宗の大綱をまとめ、九月には『東宮殿下御魁の記念・純正日蓮主義』（付血脈相承について）というタイトルで著書を出版し、天覧に供している（注2）。

すなわち、牧野伸顕宮内大臣の手を経て、天皇・皇后両陛下に献納されるとともに、東宮（皇太子）殿下には小笠原長生子爵（海軍中将）から浜尾新侍従を通じて進献された。その後江湖に広く頒かつにあたり、巻頭には小笠原長生の揮毫が載せられた。

小笠原長生はこの時東宮御学問所幹事を経て宮中顧問官に就任しているが、こうした清勇の誠意を感じて「今は大石寺派活躍の時」という談話を『大日蓮』誌に寄せている。これを見ても、その人徳や人脈の広さが想像されるのである。

ところで、晩年身体的にも経済的にも不自由な起居だったにもかかわらず、最後の力を振りしぼって著書を仕上げ、皇室に献上したことは、思うに、清勇が若年のころ師事した露師や胤師が国諫なされたことと無縁ではあるまい。病を得て余命の残り少ないことを自覚した清勇が、最後のご奉公のつもりだったのではないだろうか。皇室に宗祖大聖人の法義を献上した背景に、そうした清勇の思いがしのばれるのである。

なお、この書の末尾に「遮難」として血脈相承の問題にふれ、いまの大石寺に見られるような法主の個人崇拜の弊風を迷信として堅く戒めているのは、とかくすると井の中の蛙になりがちな宗門僧俗にあって、荒木の卓見を示すものともいえよう。

さて、病後の体調はその後小康を得たが、あまりはかばかしくなかつたようで、やがて意を決して身辺整理をすることになる。大正十一年には法華講総講頭も辞し、福重照平の住職する饗庭の妙静寺に寄寓している。

(注1) 小田原市立図書館の山県公文庫にこの時の献上本と思われる書が所蔵される。「日蓮主義 大日本国民 乃魂」荒木英一「荒木清勇」中弥兵衛「中光達」奥付に「贈呈者」と山県公の筆跡と思われる書入あり。



妻きぬ（寺田屋の三女）

（注2）この時の献上本は宮内庁図書寮文庫に所蔵される『純正日蓮主義』荒木英一がそれに該当するものと思われる。

* 「生まれ変わりてご奉公せん」

大正十年の春、妻きぬに先立たれ、自身も病に倒れることがあって、以来、急に老いを感じていた荒木清勇は、もう与えられ

た時間の残り少ないことを思っていたようで、総講頭も辞退し、妙静寺に身をよせている。終の住処となった田舎寺の静かな明け暮れに懐古の思いにふけりつつも、なお正法興隆の熱き志を失うことはなく、その思いを筆に託すのであった。

すなわち、本多日生が『法華』誌大正十一年四月号に「法華経の宗教観」と題して曼荼羅本尊を軽視する論説を書いたことに即反応し、『大日蓮』に「老婆心」という題で、痛烈な批判を加えている。

ついで『白蓮華』の大正十一年七月号には

「是は私の懺悔であります」と題して、その生涯をふり返って、法友諸君に自身の信仰觀を披瀝するのであった。以下にその全文を転記する。(注||現代文に直した)

「私は昨年の秋、拙著の序分に告白しました通り、明治四年十二月から本宗に帰入し、本門戒壇の大御本尊を信行する身となりました。

それ以来、明治六年に大教院より各宗ともに一大総本山を定めそれに所轄すべしと命令が出ました。そのさい時のご貫主五十四代日胤上人が不惜身命のご諫争を遊されしました。私もその時、どこまでもお伴をする決心で、講中の主な諸君と永別の水盃をして上京しましたのがそもそもご奉公の始めでした。

その後明治十六年に御本山の財政整理のため護法會議を設立し、同十七年五月より十八年十二月に至る三門林伐木事件の運動、同十八年より三十三年に至る十五ヶ年間にわたる七ヶ本山と分離独立の永年の運動、同四十四年より四十五年にわたる宗名公許運動など、為法為山にいささか微力を尽しました。

けれどもこの間には有志諸君の助力もありましたゆえ、要するにこれは聖祖に対し奉るご報恩謝徳の万分一のご奉公にすぎないのであります。

また壮年のころより諸宗を折伏し、宗内の各教団と問答対論も随分いたしました。



荒木清勇。堂島の自宅にて。

ご利益で毎度勝利は得ましたけれど、正法は信じ難いと見えまして、その割に効果はありませんでした。

また興学布教のことについても先輩諸君と協力してみました。途中で障碍ができませんでした。遺憾ながら立ち消えとなりました。

また著書も少々いたしましたが、その発刊については特志家諸君の御合力を仰ぎましたので、これらもただ化他の修行の一分にして、真の自行の修行とはいえません。

されば自行の修行はいかんと省みれば、朝夕御本尊に向い奉って勤行したのが関の山で、いわゆる身口意三業の修行のうち口と意の修行は細々ながらしましたが、身の修行にいたっては全くゼロというべきでありました。これが、今回私が懺悔する大眼目であり

ます。

私は元真宗の家に生まれまして、幼少の時から何事も因縁、過去世の御約束ということが天窓に染みこんでいるところに、本宗の信者になりましたからなおいっそう、深くこれを感じるようになりました。ただし転重軽受の法理や、現世の因がこの世で顕れなくとも来世の果となる道理は心魂に徹しておりますから、何事についても、あきらめということとは自分で自分の身をあやしむぐらいに、よくつくようになりました。ついには妻子の愛情においても自己はかくまで薄情な性質が知らんと思うほどに執着心がなくなりましたが・・。ここにおいて一利一害の観念が起りました。それは外のことでもない。私の業務の事でありませぬ。

私は二十一歳に大阪へ来ましたがその時は今と違って、丁稚奉公するにも確かな保証人がなくては置いてくれる家はありません。素より知る人は一人もない。加えるに旅費はわずかよりなし。そうこうするうち一日金二朱則ち今の十二錢五厘のはたご代に困るようになりまして、やむをえず下関より昔の早船に同船した人をたよって、堂島の米相場屋の店に奉公しました。

それが習慣となりついに相場師となりました。ところがご利益か過去世の果報か、または偶然のへり当りか知れませんが、少々儲けまして米穀取引所の仲買人たる公許を得

て、続いて商業会議所の会員に選挙せられ、また市会議員となりまして、ちょっとだんだん拍子で少し出世をいたしました。これをみなご利益と感じて、信心はますます堅固になりました。とともに

『法華經の行者の祈りのかなはぬ事はあるべからず』

との御金言を深く信ずるようになりました。しかし、別段現世のご利益を祈ったわけではありませぬが、信心さへすれば金儲けはできるものと心得て、勤儉力行という人道かくべからざる要件を自然とおろそかに思うようになりました。但し、『法華經の行者の祈りのかなはぬ事はあるべからず』との御金言は決して偽りではありませんが・・・。これには深い御法門があります。

しかるに、それをよく聴聞せず、このうえ儲けたら、半分は御法の事にして半分は自己の所得にせんなどと勝手な考えを起こし、まるで御祖師様と組合商業するやうな気になり、(まさかそんな事ありませんでしょうが・・・)信心さへすれば、身業の修行はしなくとも金は儲かるものと考え、営業の空実や人によって因縁因果の相違のあることをうち忘れ、ただ信心さへすれば世の中は苦もなく渡られるものとのみ思って、うかうかくらしている中に、商業上では損失をする、家事上には災害が起こると、にわかに狼狽してお寺に朝参りをするやら、御本山に月参りをはじめると、ご祈祷を願うやらし

ても、ちよつともききめがないと、終には信心を怠り、はてには謗法する人があるようでありすが・・。

私はあるがたい事にはこの御大法を信じ始める時から、不自惜身命の大決心で、

『詮ずる所天も捨てたまへ、諸難にも値へ、身命を期とせん』

という開目抄の御金言を服膺しておりますから、謗法はしませんでした。随分あぶない所まで行きました。

この時、実業家の親切な親友から『空業はやめろ』と忠告して頂きましたが、ほかに覚えた業務がありませんから、少しでも金融ができるのと元の味を思つてすぐ相場に手を出し、売れば上がる買へば下がるといふ破目で、今日ではどうも致し方なくなりました。

顧みれば過去世でよき種をまいたかどうかも知らないうえに、この世でまた力行の因をも植えず、ただ果報のみ得んとするのは、いわゆる『本因なくして本果あるべからず』との聖訓に背くものです。もとより儲かりそうなハズはないのに、鈍くも七十二歳の今日初めてこれを自覚したのは、実に恥じ入る次第であります。これが即ち壮年より空業に従事して勤儉力行をしなかつたからであります。前にいささか儲けたのがご利益でもなければ、後に苦境に陥つたのが御罰でもない。これをご利益とか御罰とか思うのは、

未だ迷信の中である。損益・苦楽・浮沈ともにみなご利益と思い、いわゆる『苦は苦とさとり楽は楽とひらき苦楽ともに南無妙法蓮華経・』と唱へるようになれば、それこそ真の信者であります。

私のように七十二歳になってこの事を自覚したのは馬鹿に遅うございませけれども、八十歳に心づいてよりほとんど十年ばかりまだ早い。もし一生涯これを自覚しなかつたとすれば、何万劫早かりしか知れませんかと思ひまして、だんぜん今日より万事をなげうち力行生活をする事にいたしました。

以来は聖祖の御身業読誦にならつて身業自行の信心を励み、従来御懇情をこうむりし諸君に対しては、あいなるべく現世において御恩に酬いるつもりであります。

私のような愚鈍なご信者はもはや今日の世の中には絶無でありませうが、もし万一にでもありましたなら、私がよい手本です。

しかし私は、信心をおろそかにして業務のみを御励みなさい、というのではありません。信心修行の功德も、勤儉力行の世財も、積功累徳の思いで貯蓄して、老いて私のやうに後悔なされぬように、信心と業務とを、あたかも鳥の両翼、車の両輪のごとくせねばいけない、いわゆる『乗戒俱急』になされたいのであります。このだん懺悔かたがたおこがましくもご注意を申しあげる次第であります。聖祖曰く、

『今末法は此の妙法曼陀羅を身に持ち意に念じ口に唱え奉る可き時也』
と。嗚呼。妙法を身に持つ人は実に爪上の土なるべし。

南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經。」

清勇居士が、おのれの信心を告白反省し、法華講衆に忠告したことが、はたして、いまの世の中にないかどうか。

創価学会の折伏闘争がさかんだったころ、生業をおろそかにして家庭崩壊に至った人が数多くいたことは事実である。今でも正宗系の教団では幹部の扇動に振り回されて勧誘運動に奔走する人が少なくない。いやそれ以上に救いたいのは、受動的で善良な庶民を煽り立て、人々を熱狂させる陰で、その信仰心を踏み台にし、名聞名利を求めてきた大幹部達であろう。

清勇居士も、現代の総講頭や大幹部の姿を見たら、あいた口がふさがらないのではないだろうか。

*大師号宣下

大正期は、国家主義の風潮に乗ずる形で日蓮主義がさかんになった時代でもある。その

ひとつの到達点がこの立正大師諡号の宣下である。

仏教各宗の祖師達は、それぞれ朝廷から〇〇大師という諡号を宣下されていたが、日蓮大聖人とその門下教団には大師号を奏請するような動機も機会もなかった。そこで本多日生らが、日蓮門下統合運動が不調に終わった替わりに、門下統一の新たな目標として主唱したものであった。近代日本の天皇中心主義の社会にあっては、体制内で認知され、布教していくには、こうした方策は有効この上ないものであっただろう。

大正十一年になると運動の機運も盛り上がり、文部大臣を経由して宮内大臣に請願書が提出されることになった。そこには、各門流の長をはじめ各界有力者の名が請願者として連ねられている。その顔ぶれは、軍人、政治家、官僚など門下の総力をあげての運動だったことが知られる。

「日蓮聖人大師号降賜請願

(本文省略)

大正十一年九月十一日

日蓮宗管長

大僧正

河合日辰

日蓮正宗管長

大僧正

阿部日正

顕本法華宗管長

大僧正

本多日生

本門宗管長 大僧正 瀨島日濟

本門法華宗管長 大僧正 尾崎日暲

法華宗管長 大僧正 津田日彰

本妙法華宗管長 大僧正 清瀨日守

日蓮宗不受不施派管長

一等上座釋 日解

日蓮宗不受不施講門派管長事務取扱

權大僧正佐藤日柱

伯爵 東郷平八郎

子爵 加藤高明

床次竹二郎

子爵 小笠原長生

犬養 毅

井口省吾

田中巴之助 (智学)

木内重四郎

佐藤鉄太郎

矢野 茂

大迫尚道

かくして同年十月十三日に「立正大師」の宣下があり、慶祝のさまざまな行事が行われている。日蓮主義が最も盛り上がりを見せ、広く社会に浸透した時期ともいえよう。

荒木清勇も具体的には記さないがこの運動に側面から協力したようである。宣下の報を聞いて早速「奉祝日蓮大聖人諡号宣下」と題して大聖人の仏法は立正安国に尽きること、立正大師の諡号は最もふさわしいとして『白蓮華』誌に祝辞を寄稿している。

もちろん、「いまさら大師でもなからう」という意見が当時もなかったわけではない。けれどもそれは少数にすぎず、当時の宗門僧俗の大多数は歓迎すべきこととしてとらえられたようである。

たしかに宗祖の国家主義を超越した精神を考えたとき、手放して誉められるものでもない。天皇の権威の裏付けによってその価値が左右されるような大聖人ではないし、名聞名利を戒められた大聖人の御意にもそぐわない。

そうかといって時代の違いも考えず、安易に謗法などと決めつける性質のものでもない。もとより謗法厳誠とは他宗他門の人々と一切交際を絶つことではない。『化儀抄』にもあ

るように世間交際上の礼儀や応接はあるべきで、宗教と関わりの無い世事の次元は勿論のこと、宗教の次元でも内外相對、大小相對、権實相對の次元等で、例えば反仏教運動に對応する場合や、對念仏批判に日蓮門下の他門徒と協力して当たるとか、宗祖の御遺文研究に他門と協力する事などなら問題では無い。この例も現実社会に大聖人の仏法を流布する責任と、当時の天皇制国家主義社会における世間悉檀ということを考えれば、否定的に捉える問題ではないと思う。

現代のような言論思想の自由な時代にあつて、無責任な立場からは何なる批評もたやすいことだが、それはまた自分勝手な論評になりかねない。ましてや創価学会系の謀略のためにする批判など、その体質や狙いを考えると、とても同意はできない。

荒木清勇は、この慶事に際して、同年十一月号の『大日蓮』にも「奉祝日蓮大聖人諡号宣下」という題で所感を寄稿し、ついで翌十二年二月には戒壇御本尊の由来を考証した『世界第一本尊論』を賜大師号紀念として発刊（B六判三二頁）。この書も天覽台覽に献じている。また巻頭には小笠原長生の揮毫をもらっている。

*終焉

大正十二年九月一日、関東地方をマグニチュード8の大地震が襲い、死者九万一千余人、

全壊・焼失家屋四十六万という未曾有の大惨状を呈した。

この大災害を契機に、社会はやがて大きく軍国主義に振れていく。

震災の被害は本宗も例外ではなく、東京の常泉寺・本行寺・妙縁寺・法道院や横浜教会は焼失、小田原教会・神奈川教会は倒壊、そのほか大石寺等も大客殿や宿坊が一部損壊し、かつてない大被害を受けた。

しかも宗門では直前の八月十八日に当職の正師が療病中の興津・水口屋で逝去、その葬儀が大学頭から後継に就任した柱師の導師で九月七日に執行されることになっていた。関東・東海地方の大混乱とともに、宗政の上でもこの先は一転して柱師排斥の抗争が激化するなど多難な時代の幕開けとなる。

こうして世間騒然たるさなか、日ごとに心身の衰えを自覚した清勇は、

「老いぼれし身の永らえて栓もなし

生まれ代わりてご奉公せん」

と辞世の歌を詠んでいる。そして、十月二十八日 満七十三歳を一期として生涯を閉じた。

葬儀は、僻遠の地のうえ大震災後の通信や交通混乱の余波が続いており、わずかな知己が集って妙静寺でひそやかに営まれた。後に妙静寺総代を務めた辻九兵衛らが遺体をリヤカーで斎場まで運んだという。その静かな野辺の送りは、かえって名聞名利を捨てて宗門

近代化の礎となること以外に望まなかつた清勇居士にふさわしいものといえなくもない。

訃報を聞いた東京の法友は妙光寺の有元住職を發起人として初七日忌を営み、僧俗五十数名が参列して唱題回向のうちに故人の面影を偲び、また清餐の後いつまでその人柄や行実を語り合つた。法名は強信院清勇日進居士と号す。

*墓碑建立

その一周忌に当たたる翌年十月には、中光達（弥兵衛）の発願によつて清勇居士の墓碑が妙静寺墓地に建立された。これまでも中光達は清勇の人となりを敬愛し、厚い信義によつて生涯かわることなく支え続けたのであつたが、清勇死してなおその情義は変わらなかつた。そのことは、次の文によつても良くうかがえる。すなわち墓碑開眼法要のおりの福重照平の奉告文である。

「奉告文

不肖の子照平、焼香再拝 謹みて先考の墓前に申す。

先考貧困の家に生れ、幼にして既に孤独り、つぶさに人生の惨苦を嘗む、中頃やや栄達の階（あがりはし）に昇りしと雖も晩年また頗る振（すぶ）わらず、終（つい）に此の所に客死す、嗚呼（ああ）悲しい矣哉。

然れ共その宗門的生活を見れば、所轄論に、抜木事件に、興学布教会議に、一宗の独

立に、宗名の改称に、余人不共の活動を建つ、先考また義学の研鑽に於ては元より在家
 処世の余暇に成るを以て未だ尽きざるものあるが如しと雖も問答もつともその長ずる処
 なり、屢々強敵と応酬して之を挫き本宗在家の重鎮たりしかば彼に失ふもの此に償つて
 餘りありと云ふべし。

先考の知己師友皆先き達て没し、頽齡常に寂寞の歎をなす。その産を破るに及びて殆
 ど人の之を顧るものなし。僅に数輩の士の其の失を以て得を没せず、其の世間の作法を
 以て出世の行儀を捨てず、以前誼を通ずるあるのみ。就中光達居士中君、数々の資を
 抛なげうてその窮乏を救い著作の刊行を補助して其の志を成さしむ。その当山に病を養ひ安
 詳として臨終するを得たる、また実に居士

の厚意に外ならざるなり。

先考没するに臨み和歌を光達居士に贈つ
 て曰く、

ともすればしめり勝ちなるハンカチーフ
 君の情のうれし涙に 清勇

一首以て居士が友愛と先考感激の情を知る
 に足る。今また居士墓碑を建てて弔祭依る



滋賀県妙静寺の清勇居士の墓

所あらしむ、先考はた地下に何とか云わんとするや。

かえりみ
顧

るに不肖の子、真に不肖なり自行未だ確立せず化他に寸功なし。仏飯を徒食して生を一時に竊む、先考の志を展のべざること甚し、先考の生前没後その身を喜ばしめその心を悦ばしめしもの一として之有ることなし。覆載の恩を受けて寸尺も之を報ぜず、今光達居士の懇志に成る墓碑に対して俄に言ふ所を知らざるなり。

然れども志は未だ廃せず、地涌の流類を以て任ずることは即ち有り、希ねがはくば法所に安座して数年の歳月を假し給へ、必ず靈山会上に先考の破顔微笑を得ることを期せん。また先考が重恩を受くる所の光達居士に報ずることあるを念とせん。

言は意を尽さず、所詮方法一言南無妙法蓮華經と唱へ奉りて墓碑を供養す。

維時大正十三年十月十六日

比丘照平 和南

(『妙静寺史』より)

*日蓮本仏論

中光達のあつい情義には、さすがに福重照平も深く感ずるところがあった。従来から世俗離れして放埒な性格だった照平房は、ややもすれば清勇が心を痛めるようなルースな一面をもっていたのであった。その照平が父の墓前にぬかづいて、三度まで「不肖の子」と

低頭慚愧し、その恩に報いることを涙ながらに誓ったのである。父の訓育とその法友光達居士の至誠によって、心奥から醒めたのであった。

かくして照平はこの前後数年、法施をもってその父母の恩に報いようと法門研鑽に寢食を忘れて精進している。幾つかの失敗談が残るほど好きだった酒もヒタリと禁酒して改心したという。その成果が三年後の昭和二年九月に刊行された名著『日蓮本仏論』であった。

『日蓮本仏論』に序文をよせた亨師は、照平がかつて詩作に耽り禪に傾倒し、斗酒を辞さない不羈奔放な性格であつて、父清勇の悩みの種であつたこと、それが、清勇の晩年に、一転ようやく翻意し、まじめに宗学を研鑽に取り組みだし、永年の愁眉を開いたことをのべている。そして、

「(清勇)翁はこの一転機を予に告げて・・喜ばれた顔が、莞爾と現前に彷彿する・・」
 といい、この著書の刊行は清勇居士にとつても自分にとつても、いかほどうれしかとも述べている。

また、照平房が法門研鑽にめざめた事情はその自序にも記されている。

「自分にとつては父母の恩を蒙ること尋常にこえている。種々世間の勉学もさせてもらつて、一つもものならず、それでいて三十過ぎてても、なお父母の厄介になつていた。その後僧籍に入ったが、ただの一日も親孝行しないうちに、数年前父母を失つてしまつ

た。しかも自分の法門の理解は父の啓発によるもので、いまさらながら、父母の深い恩を思うにつけ涙に暮れるばかりです・・」(趣旨)

といい、父母と師匠の報恩にせめても本書を擬するとしている。

*有縁の人々

ところで、この『日蓮本仏論』の自序には、堀日亨・堀米・松本らの学恩・助力や中光達の外護とともに義兄荒木儀兵衛という名前があげられ、その厚情を謝するとの記載がある。

この義兄の荒木儀兵衛とは、はやくに荒木清勇に私淑し、ついに養子となってその姓名をついだ人といわれている。血縁があつたかどうかは定かでない。

かれは清勇の教化で熱心な信者となり、その一方横浜で貿易商を営んで成功し、やがて事業を拡大、小樽で缶詰工場を開いている。そのとき清勇に事業の適任者を相談したところ、清勇のいとこにあたる西尾がよかろうということになり、西尾喜三郎が小樽の工場長となって赴任することになったという。

この西尾喜三郎も清勇の影響で熱心な信者となり、小樽でしばしば布教講演会等を開き、教化した三十軒ほどの信徒で講中を結成するまでになっている。大正九年十一月には地元

の有力者越智氏らとともに小樽教会（現妙照寺）の設立にまでこぎつけている。

しかし西尾の事業手腕のほうはさっぱりだったらしく、缶詰工場の経営には失敗してしまふ。福重家の子孫に伝わる話では、「西尾は放蕩して会社を食いつぶしてしまつた」というものであるから、何か清勇の面目をつぶすようなことがあつたのかもしれない。けれども西尾は大正十四年に樺太に渡つて再起を期した。ここで西尾は新天地での事業とともに弘教にも尽力し、各地を熱心に布教して歩き、同年十月には真岡町に樺太教会が設立され、翌年有元広賀らが巡教に赴いている。

いっぽう荒木儀兵衛（昭和二十年寂）は東京・中野に居を構え、妙光寺に所属していたが、彼もまた清勇ゆずりの熱心な信仰者であつた。昭和初年頃には、橋本某を世話人として毎月歓喜寮の堀米泰栄や大石菊寿・福重照平を講師にまねいて自宅を開放し、勉強会が開かれている。これには常時四、五十名の参加者があり、創価学会の初代会長牧口常三郎なども出入りするようになっていった。やがてこの荒木儀兵衛宅での月例お講と平行し、中野・歓喜寮での月例講義に発展していったのである。

なお、荒木儀兵衛家はその後も栄えて子孫に三越池袋支店長になつたものがあるというが、確認はしていない。

ところで、荒木清勇の次男・隆平（昭和十九年寂）は、大阪商科大卒業後、兄を迎えに

渡米し、帰国後は三井物産に入社している。その後福岡に転勤したが健康に恵まれなかつたらしく、退社して療養に専念することになった。たまたま妹の相部夫妻（銀行家）が大連に住んでいたために、しばしば海をわたり、そこで本宗信徒として頑張っていた奥村半吾・猪俣重三郎らを助けて布教に尽力している。その後、三、四十所帯にまで発展したため、昭和十四年には日蓮正宗発信会として講中を發足、兄の福重照平を大連に迎えている。こうしてみると荒木清勇の感化を受けた人々は強信の方が多く、また先陣をきって海外にまで布教をおこなっている。

このことは、戒壇御本尊に「一閻浮提総与」という意義と名称を提唱した清勇居士の正法弘通の志が、なお生まれ変わって世界中に大聖人の仏法を広宣流布せんとの願いを物語っているのかもしれない。（おわり）

荒木清勇年譜並びに著述目録

(※印は単行本、*印は雑誌に寄稿の論述、◎印は未刊の著作物)

○嘉永4年(1851) 長州藩、現山口県萩市の副重家に生まる。幼少で父母に死別。祖母に育てられ、八歳で荒木家の養子となる。

○慶応4年正月 伊藤博文の従者として十七歳で鳥羽伏見の戦いに参戦。

○明治4年(1871) この年単身京阪地方に来て堂島米仲買人に雇わる。またこの年日蓮宗に帰依し、その後富士大石寺流に帰依。二十一歳。(純正日蓮主義序)

○明治6年7月 所轄本山問題で胤師の請願、並びに戒壇御本尊を東京・本郷の前田邸に一時秘匿のため遷座にお伴する。

○明治8年 京都伏見の寺田屋女主人寺田登勢を入信させ、三女きぬを嫁に貰う。

○明治9年2月 富士門流八本山、日蓮宗興門派として分離独立が認可される。

○明治9年4月 在東京(諸記録◎160)この後大阪に居を構える。

○明治9年9月20日 能勢講中の離壇をめぐる妙法寺との間に倉垣問答起こる。加藤廉三・

荒木儀兵衛(清勇)兩人で対応し、翌年に落着。

○明治11年 長男福重照平生まれる。志霑問答起きる。

※明治12年9月 『一致破責之事』刊

○明治13年9月4日 霑尊を堂島の荒木家に招待。(妙寿尼伝)

○明治14年末 大阪堂島中で日本最初の渋谷ビールを譲り受け、醸造業を手がけるも失敗。

その後小西儀助に技術設備等に移譲。(日本ビール史)

◎明治15月12月5日 『池田問答記』を著す。(未刊・雪山文庫蔵)

○明治16年4月 この頃大石寺山門周辺の官有林伐木事件起こり露師の依頼で奔走、翌々年12月の解決まで折衝に従事。(「懺悔」)

○明治16年8月 本山永統と債務整理のため護法会議が開かれ全国の僧俗登山す。大石慈舎(応師)議長、荒木英一は推されて副議長を務める。

※明治16年9月 八品派西京大講頭武内寿山等と法論になるも実現せず。『邪正問答・邪正弁』を刊行してその経緯を記す。(要集⑥253)

○明治18年4月 南祐七氏の改宗につき一致派本伝寺講頭畠山氏と法論。(要集⑥333)

○明治18年6月 露師、三度目の大石寺貫主に就任。清勇は引続き分離独立運動に尽力。

◎明治19年9月 田中源吾(正法真道社)の『八大本山頭謗法書』に対し小出慈観(柱師)とともに反論する(唱導p65)『問答記録』を著す。(未刊・雪山文庫蔵)

※明治21年2月 『興門一致問答抄(内題・「問答顛末事実略記)」刊(南祐七共著)

○明治22年4月 セイロン神智学協会会長オルコット氏に遺文録を贈呈。(唱導⑥p32)

○明治22年8月27日 日蓮宗正統興門大石寺布教会の発足に際し、松島覚道・荒木清勇・加藤道栄が信徒代表として本部幹事に任命される。(布教会報①p3)

○明治22年10月19日 荒木氏商用で博多出張中、富士本師の来訪を受け布教会のために尽力することを約し金十円を即刻寄付。(布教会報③p28)

○明治24年6月12日 西国巡教帰途の応師 土屋阿部師を荒木家に招待。(布教会報②③p18)

○明治24年11月7日 濃尾大地震に荒木氏ら率先して義捐金をおくる。(布教会報②p30 36)

- 明治25年10月 本山客殿御堂屋根葺替えに五十円喜捨。(法王⑩ p 38)
- 明治25年10月 本山上地復旧願 再度提出。この頃蓮華寺正講頭を勤める。
- 明治26年10月 大阪米商会所株主8株 152中23位
- 明治26年12月 本山客殿御堂屋根葺替えにつき賞与御本尊授与。(法王51 p 20)
- 明治26年12月 興学基金につき、下山順一郎氏に賛同して建言書を提出。(同右P 22)
- 明治27年正月 荒木清勇一家正月登山。
- *明治27年11月 「島根慈本師対弁惑観心抄の妄評を破す」奇堂逸人「法王 62号」
- 明治29年 分離独立申請のため応師、釈妙覚師(学頭)、富士本師、荒木氏等々僧俗の中心者を本山に召集して会議を重ねる。(応師略伝 p 10) 荒木清勇氏亦大いに運動し極力その貫徹に尽くす。
- 明治30年9月20日 佐藤慈一・荒木清勇、分離独立の件で内務省久米社寺局長に面談。
- 明治31年6月3日 大阪商業会議所会員の推薦により大阪市会議員に当選。
- 明治32年5月日 大阪堂島米穀取引所理事に就任。同九月辞職。
- 明治32年5月26日 長男福重好平を金子堅太郎の書生として渡米、シカゴ大学に留学。
- 明治33年9月18日 興門派から富士派(大石寺派)の分離独立が認可される。
- 明治34年9月 日蓮宗富士派と顕本法華宗の法論。(白蓮華)
- 明治34年9月 上地払下げ許可。(白蓮華④ p 28)
- 明治36年3月 大阪今宮で第五回内国勸業博覧会開かれる。
- 明治37年(1904)2月 日露国交断絶、昭憲皇太后の瑞夢。日露開戦。(国交断絶の晩、

坂本龍馬が皇后の夢枕に現れ日本海軍を守る旨、言上するという。

○明治37年6月1日 大阪市会議員任期満了退任。

○明治37年6月 荒木清勇が坂本龍馬らの遺品を携え、大浦逋信大臣を官舎に訪ねる。

○明治37年9月 寺田伊助・荒木清勇参内。御下賜金と羽二重一反を賜る。

※明治37年11月 唱歌『国母陛下の御瑞夢・附大和魂』刊。寺田伊助編 冊子

○明治37年12月 東山靈山に坂本龍馬の忠魂碑、寺田屋跡に恩賜記念碑を建つ。

※明治38年12月 唱歌『大日本未来の鏡』刊。荒木英一作 冊子 ビクターレコード

○明治39年 月 大学頭不信任（加藤日普）案が上程され宗会を解散。

*明治39年10・11月 「本門戒壇の大御本尊」（1〜2） 白蓮華1巻4〜5号

*明治40年1月 「本門戒壇の大御本尊と題せる演説に対する批難に答ふ」 白蓮華2巻1号

*明治40年3月 「本門戒壇の大御本尊と題せる演説に対する批難者に再び答ふ」 白蓮華2巻3号

*明治40年4月 「幽霊の正体見たり枯尾花」 白蓮華2巻4号

*明治40年8月 「堀尊師の忙中閑話を読む」 白蓮華2巻7号

*明治40年11月 「徹夜法談を読む」 白蓮華2巻10号

○明治40年?月 福重好平米国より帰国。

*明治41年6月 「日蓮宗総本山身延山久遠寺貫主豊永日良師に対して」 白蓮華3巻6号

○明治42年7月 大阪北区の大火、堂島の自宅も類焼す。

○明治42年 福重好平は韓国統監曾根荒助子爵に従って統監府参事官に任用さる。

※明治43年9月 『日蓮宗の由来』刊。

○明治43年2月 福重好平は外交官の職を捨て日正師について出家。道号照平。

○明治43年3月 荒木清勇登山して正師に月並み御開扉を建言、自ら願主となる。

○明治43年3月 東京・芝俱樂部並びに登戸にての独一本門講の演説会にて講演。

○明治43年6月 正師蓮華寺留錫中、玉出の荒木清勇宅へ招ぜられる。

○明治44年2月20日 蓮華寺失火にて全焼す。

○明治44年7月 東京・京橋、錦亭にての演説会にて講演二席。(白蓮華)

○明治44年10月 東京・法道会創立十周年大会にて祝辞を述べる。(白蓮華)

○明治44年末 この頃、讃岐法華寺焼失以降、後住問題で紛糾し、これに牧野敬本と調停に入るも不調におわる。

○明治45年6月7日 宗名「日蓮正宗」改称認可。認可運動に尽力。(懺悔)

※明治45年7月 荒木清勇著『日蓮正宗』刊。

○明治45年7月30日 明治天皇崩御。(大正)と改元。

○明治45年8月25日 「富谷旭霈の本化血脈相承論につき弁駁」(日宗新報)

○大正元年10月20日 宗名改称申告式を大石寺にて奉修。経過報告・荒木清勇。

※大正元年10月 「本門戒壇論」

※大正2年4月 『増補日蓮正宗(宗名改称記念)』

※大正2年4月 「宝塚立会演説の顛末」

※大正2年12月 白蓮華8巻12号

※大正3年3月 「藪蛇」「負け犬の逃げ吠え」

白蓮華9巻3号

白蓮華7巻10号

B6判107頁 応師揮毫

*大正3年6月

「宣言書並付言」

白蓮華9卷6号

○大正3年

この頃、阿部日正師等による統合問題はじまる。(本宗史綱1117)

*大正3年7月

「獅子吼駁撃」(1~2)

白蓮華9卷7~8号

*大正3年7月

「日蓮正宗」藤田恵暁・清水龍山と論戦16回連載 日宗新報716輯

*大正3年11月

「清水龍山先生の解答を駁す」(三回連載) 白蓮華9卷11号~10卷1号

*大正4年5月

「重須の森を読む」

白蓮華10卷5号

*大正4年6月

「国本と定本」

白蓮華10卷6号

*大正4年7月

「娑婆即寂光」

自然鳴3卷7号

○大正4年11月

大正天皇即位式挙行。

※大正4年11月

『大日本国所立聖教の正義(即位大典記念)』刊。(天覽台覽)

○大正4年12月3日

蓮華寺落慶入仏式に当たり、荒木家より日布上人御本尊および日霽上人

天台語句を寄付する(蓮華寺再建誌p106) 12月建碑

○大正5年1月

荒木清勇と中弥兵衛『聖教の正義』を献本のため離宮及び各宮家訪問。

*大正5年6月

「真理の妙法と正理の妙法」

大日蓮1卷2号

*大正5年10月

「日蓮正宗」(8回連載)

大日蓮1卷5号~2卷6号

*大正5年12月

「文底総まくり」(5回連載)

白蓮華11卷12号~12卷4号

(『要法寺機関誌』『文底』の批判)

*大正6年1月

「一期弘法抄と日朗御讓状」

大日蓮2卷1号

○大正6年3月4日

東京・大崎館で「田辺善知先生の高等批判の弁駁」の講演会を開催。

- 大正6年5月
 応師宗内の布教団を統一し日蓮正宗会として発足、『大日蓮』誌を発刊。
 荒木清勇、田辺喜一らも尽力する。(応師略伝 p20)
- ※大正6年6月
 荒木清勇の講演録『長夜の大燈』刊。発行者田辺喜一 B6判104頁
- 大正6年8月
 福重照平師滋賀妙静寺の初代住職になる。
- *大正6年8月
 「立正安国論に就いて」
 法華4巻8号
 (『安国論を正法帰依ではなく正師帰依と解釈])
- *大正6年9月
 「承久書の真偽いかん」
 法華4巻9号
 (『承久書〔弘安四年富木殿宛〕を偽書とする論考])
- *大正6年12月
 「末法の撰折」(一)
 法華4巻12号、
- *大正7年2月
 「大日本国民の魂」
 法華5巻2号
- *大正6年12月
 「末法の撰折」(二)
 法華5巻3号
- *大正7年6月
 「聖書拝読に就いて」
 法華5巻6号
- ※大正7年2月
 『日蓮主義大日本国民の魂』刊。(天覧台覧)
- *大正7年11月
 「親鸞研究を読みて」
 法華5巻11号
- *大正8年2月
 「田中智学先生の高教を仰ぐ」(一)、(二)
 法華6巻2号、4号
 (『本化聖典大辞林の一念三千につき当家文底法門のから質疑])
- ※大正8年4月
 『大日本国是と全世界の帝王』刊。施本主馬場藤七
- *大正8年5月
 「大日本国是と全世界の帝王」(2回連載)
 大日蓮4巻5、6号
- *大正8年8月
 「藪蛇」
 大日蓮4巻8号

*大正8年11月 「一念三千の法門について」(6回連載) 法華6卷11号〜7卷4号

(『山川智応氏の回答につき文底事一念三千の法門を反論』)

*大正9年8月 「希望」 法華7卷8号

(『弥四郎国重の考察と戒壇本尊・佐渡始頭本尊の真偽公開を望む』)

*大正9年9月 「日蓮大聖人の国体観」 法華7卷9号

※大正9年10月 『日蓮大聖人の国体観』刊。発行者中弥兵衛B6判20頁大迫大将揮毫

※大正10年1月 『産湯相承略解(聖誕七百年記念)』刊。発行者中弥兵衛

○大正10年2月11日 妻きぬ死去 行年六十六歳

※大正10年9月 『純正日蓮主義東宮殿下御魁の紀念』刊。(天覧台覽)小笠原長生揮毫

*大正11年6月 「老婆心」更賜庵老碌 大日蓮7卷6号

*大正11年7月 「これは私の懺悔であります」更賜庵。白蓮華17卷7号

*大正11年8月 「懺悔」更賜庵老碌 大日蓮7卷8号

○大正11年10月13日 日蓮大聖人「大士号宣下」。賜号に尽力す。

*大正11年11月 「奉祝日蓮大聖人諡号宣下」 白蓮華17卷11号

○大正11〜12年 病を得て妙静寺に身を寄せる。

※大正12年2月 『世界第一本尊論』刊。(天覧台覽) B6判32頁小笠原長生揮毫

*大正12年7月 「堀慈琳師に謹謝す」 大日蓮8卷7号

○大正12年10月28日 荒木清勇死去。 行年七十三歳。法名強信院清勇日進大居士

辞世「老いばれし身の永らえて栓もなし 生まれ代わりてご奉公せん」

○大正13年10月28日 中弥兵衛の発願で妙静寺に墓碑建立。

《参考・対論者》

- 大正2年3月「日蓮正宗駁論」 藤田恵暁 日宗新報648号
 大正2年7月「荒木清勇に答う」 清水龍山 日宗新報717号
 大正8年9月「荒木清勇に答う」 田中智学 法華6卷9号
 大正8年9月「荒木清勇氏に答ふ」 一念三千 山川智応 国柱新聞256号259号
 大正9年12月「荒木清勇氏に答ふ」 岡教遠 法華7卷12号

《参考・関係者》

- 宗祖の主師親を論ず 副重好平(醉禅) 白蓮華2卷11号 明治40年12月
 乃木將軍を追懐して 副重醉禅 白蓮華9卷9号 大正3年9月
 雜誌獅子吼に最後の引導を与ふ 副重醉禅 自然鳴3卷3号 大正4年3月
 碎破邪論(1〜4) 照平房 自然鳴3卷12号〜3号 大正4年12月〜3月
 口演(1〜2) 荒木隆平 大日蓮24卷2〜3号 昭和14年2〜3月
 学校教育 荒木隆平 大日蓮25卷4号 昭和15年4月
 神本仏迹論に就て小笠原師の教を仰ぐ 荒木儀兵衛 世界之日蓮5卷1号 昭和13年1月
 『日興上人略伝』出版 鈴木日霑 大阪教育社謹白 明治16年1月

あとがき

この書は寺報『恵日』に平成十一年四月から十五回にわたり連載した「忘れられた総講頭 荒木清勇居士略伝」を補訂してまとめたものである。

平成十年、境内の皐月が色鮮やかに咲き揃ったある日の昼頃、二人の紳士が一冊の本を携えて源立寺を訪ねてみえた。それまで面識はなかったけれども律儀そうな感じの人で、何事か大事な話をという雰囲気だったので、客間に通ってもらった。早速自己紹介がはじまると、一人は福重照平師の子息で福重広輝氏（堺在住）、もう一人はその友人猪俣正治氏（福岡在住）、差し出された本は出版されたばかりの『福重照平の信行学』だった。

聞けば福重氏は妙静寺で育ち、かつて（戦前）は、短期間だが宗門に籍を置いて妙光寺に在勤したこともあるという。事情あって在家に戻っても信心だけは受持しており、近年の宗門の状況を伝え聞いて憂慮されていたようである。とりわけ昭和初期の管長選挙に伴う醜聞を身近かに経験していただけに、権力志向と法主信仰に堕してしまった宗門に批判的で、福重照平師の教化を受けた猪俣氏ご兄弟の特志で、福重照平師の諸論文を出版し、これを諸方面に贈呈し、宗門覚醒の一助にでもなればとの趣旨であった。

福重照平師は名著『日蓮本仏論』の著者で、滋賀県妙静寺の住職であったこと、荒木清勇居士は最初の全国総講頭で、明治・大正期に法論・布教に大活躍した人という程度の知識はあったが、迂闊にして、この二人が親子であることは知らなかった。

また、以前から荒木居士に関して、その論文や著作物を眼にしていたから尋ねてみると、思いがけず寺田屋のこと、堂島米穀取引所の仲買人のこと、ビール製造の草分けのこと、

先祖のことなど、未だ聞いたこともない話が続き、興味津々でメモに追われた。昼食も忘れて気がつく和对談は五時間近くにもおよび、さすがに疲労を感じる程だった。

その後、ウマが合うというか、意気投合というか、何度か訪ねてこられ、小生もその来訪を楽しみにするようになった。そのうちに、この出会いに宿縁みたいなものを感じ、今のうちに荒木居士の伝記をまとめておかなければ、後には誰も知る人はいなくなると思いに至った。

しかし居士の生涯は百年以前の事、福重氏の記憶は伝聞や想像が入り交じっており、実際に当時の文献に当たってみると年代や人物が異なるなど、そのまま活字にすればウソになりかねない。大半は一々に検証が必要なもので、かなりの時間と手間を覚悟しなければならなかった。

例えばこれは今でも未解決だが、居士の妻きぬの兄弟姉妹、すなわち寺田屋とせの子どもについて、諸書に一男二女とか、一男六女、あるいは子たくさん、養子などとまちまちに書かれているので、何度か質問して、六人の嫁ぎ先をも教えてもらった。ところがこれが年代の合わない人物であったり、他に有力な別の人がいったりで、未だに成案を得ていない。・・・とはいうものの、福重氏の御教示が無ければ此の書も生まれなかったことは確かである。

その後、宗門の雑誌、能勢順道師編『諸記録』や府立図書館所蔵の郷土史資料等から多くの足跡を拾い出すことができ、ようやく伝記としてまとめる見通しが立った。連載を始めるまでに、すでに約一年もの時間が経過していた。

連載が始まると福重氏も猪俣氏も大変喜んで、貴重な写真や資料など度々届けてくれた。ところが五回目位に福重氏から体調を崩して入院先から手紙で知らせてきた。「単調な病院生活ですが、これまで縁のあった知人・故人約三百人のために、病床から三百返のお題目を送ることを日課にしており、案外忙しいものです。伝記のこと、どうぞよろしくお願ひします」という内容だった。十月頃お見舞いに行ってみると、気丈そうに振る舞ってはいたが、末期癌らしく、かなり弱って見えた。訃報が届いたのはその年末だっただろうか。またそれから数年後には福岡の猪俣氏の訃報も届いて、人と時節の移ろいを痛感させられた。

今振り返ってみると、二人は、この忘れてはならない宗門の恩人のことを書かせるために現れたような気がしてならない。二人とは短い交流期間であったが、記録として残るように、当初からいづれは単行本にすることを約していた。その後も折にふれて資料収集に心がけていたが、未だ十分でないままに約二十年が過ぎてしまった。積み残したものも多いが、この辺で見切りをつけ、約束を果たすこととした。

なお、荒木清勇に関する未収録の出来事や資料等ご存知の方がおられましたら、ぜひご教示頂くようお願いして、筆をおく。(おわり)

忘れられた総講頭 荒木清勇居士略伝

令和元年十月一日 印刷発行

著作者 菅野憲道

発行所 大阪府池田市槻木町ノ番10号

源立寺

印刷所 大阪市都島区中野町之丁目12番之号

株式会社 ホープツワン

〈不許複製〉



